

教育実習レポート

[私立 K 高等学校 情報] 氏名：N. S

私は母校である私立 K 高等学校で3週間の教育実習を行った。普段の学生生活では絶対に体験できない有意義な経験であったとともに、教師になろうという自分の意志を一層強めるものにもなった。一つの授業を持ち、一つのクラスを担当することの大変さや面白さ、やりがいを感じられる3週間であった。私は、この実習で得た体験を糧に、教師になろうという夢の実現に向けて日々精進していこうと思う。

(1) 準備無くして良い授業はできない

私が教育実習で痛感したことは、いい授業をするにはどこまで準備ができるかにかかっているということだ。授業の質は、準備にかけた時間にそのまま反映される。当たり前のことではあるが、実践するのは想像以上に大変であった。

授業の準備の第一段階となるのが学習指導案だ。私は、第1回目の授業の指導案を、事前の教材研究の知識を使い、とても念入りに作成した。しかし、私の教科指導の先生(A先生)は、「50分もつかない？」と言った。実際にシミュレーションを行ったところ、30分程度で予定箇所を終了してしまい、A先生からは「指導案は台本やと思って。自分がやることと発問の内容、それによってどういう板書に展開するのかまでしっかり固めたうえで、それを頭に入れて授業をすること」との言葉をもらい、指導案のやり直しをすることとなった。確かに見直してみると、教える單元についての詳細は書かれているものの、それをどのように伝え、どのような資料を使うのか、どのような発問の仕方をするのかなどの「伝え方」の部分がほとんど書かれていなかった。私は指導案の内容をより具体的なものにし、第1回目の授業に臨んだ。

(2) 生徒が参加できる時間を

私は第1回目の授業を終えた時、中々の手応えを感じていた。自己紹介は事前に考えていたため、割と反応が良かった。授業自体も、指導案に書いた通りの伝え方で伝える事ができ、大きな失敗をすることなく最初の授業を終えた。しかし、最初の20分あたりは反応が良かったのに、後は眠たそうに聞いている生徒がいるなど、空気が少しずつ重くなったと感じた。A先生からも「後半が重たかった。何が原因だと思う？」と尋ねられ、私は自分の板書計画と指導案を再確認したところ、すぐに原因が分かった。ほとんど自分が話す時間であったのだ。しかし、どうしてもその単元は伝えることが多いため、多少は仕方ないとA先生もフォローをしてくれた。そして「同じ話すにしても、声に抑揚を付けるとか、発問を増やしてキャッチボール形式の授業にするとか、写真を見せるとかするだけで、だいぶ違う」というアドバイスも頂いた。「キャッチボール形式の授業良いな」と思ったが、自分にできるのか不安になった。

私は、家にある小さなホワイトボードを使用し、目前に生徒がいると想定し、時間を計測

してシミュレーション授業（発問→説明→板書）を行い、どのように展開するかを何度も練習した。次の日、担当授業（全4クラス）の最後のクラスで、1回目の授業の内容を行った。前日のシミュレーションが功を奏し、最初のクラスとは比べ物にならないほど生徒の反応が良くなっていた。A先生からも「良くなったね。相当やってきたみたいやね」という言葉を頂き、大変嬉しかった。もちろん、今思い返してみると改善点は山のようにあったが、練習の成果は出るのだなと感じ、授業に自信が持てるようになった。

（3）学級運営は授業よりも大切で、かつ難しい

授業のことで頭が一杯になり、自分の学級担任クラスのホームルームは淡々と進めてしまう日が増えていた。クラスの生徒とはしっかりコミュニケーションをとるようにし、生徒一人一人の名前・部活・特徴などを自分用のノートにメモをしていたが、私から話しかけることがほとんどで、若干距離を置かれていた。実習4日目に学級担任の先生（B先生）に呼ばれ、「このままただの実習生で終わるよ」と言われたことが強く印象に残った。私は目の前のことに追われるあまり、終礼の時間を淡々とこなしていただけであった。翌日のホームルームは実習生に時間を頂けるとのことで、この時間を利用し、質問タイムの時間として生徒たちに私への質問を紙に書いてもらい、それに答えることにした。確実に生徒とコミュニケーションがとれる方法だと思い実施した。生徒たちは思っていた以上に私について知りたかったのか、全員夢中で書いてくれた。質問の1つに「どうして先生になろうと思ったのですか」とあり、自分の素直な思いを伝えると、生徒は予想以上に感動してくれた。その日からまるで様子が違い、生徒の方から話しかけてくれるようになった。中には、「先生の授業いちばんわかりやすかったです」と言ってくれる生徒もいて、本当に励みになった。いつしかクラスの生徒たちは、私が実習を頑張ろうと思える一番の支えになった。

（4）最終日に感じたこと・今後に向けて

やっと授業にも慣れ、学級運営らしいことができるようになった頃、教育実習は最終日となった。初日は長いと感じていたのがうそのように、もっと実習を続けたいと思うようになっていた。最終日の授業で、カリキュラムに沿って進めようとするあまり、時間の関係で自分が用意していた中で一番やりたかった授業ができなかった。悔しくて仕方なかったことをA先生に伝えると、「進むスピードと分かりやすさの両立は、授業の永遠のテーマだ。悔しいと思えるってことはそれだけ一生懸命頑張ったということだから、次（現職教員）に繋がるようにしたらいい」と言ってもらい、本当に励みになった。私も将来実習生をもつことになったら、A先生のような助言や指導ができるようになりたいと強く思った。

最後のホームルームで生徒たちが寄せ書きを渡してくれた。B先生に「実習で大変だったと思った部分があるあなたの足りていない部分です。しっかり受け止めて努力してください。」と声をかけて頂き、実際に先生になるということは、相当な覚悟が必要だということを教えて頂いた。

3週間の実習は、本当に私にとって有意義なものであった。自分が誰かのために、必死で夢中になって頑張れる体験であり、大変なことも乗り越えられると感じた。しかし、実際の

先生が抱える大変さに比べれば、本当に一部のことしかやっていないとも感じた。私の実習校は大変環境に恵まれていて、指導体制や設備なども充実していたが、多くの学校はこれらの環境も不十分であり、私が知らない世界がまだまだ待っているということも理解しておかなければならない。